

『更級日記』における孝標女の取捨選択

長岡るみ

菅原孝標女が書いたとされる『更級日記』の中には、一人の女性の人生がある。日記の中に存在する「書かれた」人生。作者孝標女自身の人生とはまた違った「書かれた私」(以下、「私」と記す)の人生である。作者にとっては、過ごした日々も記した日々も、自分の人生と言えるものだろう。

しかし、読み手がこれらを「同じ人生」として読むのは時として危険な行為になる。忘れてはならないのは、書き手が日記を記す上で行った取捨選択の存在である。当たり前のことではあるが、目の前に記されているものが全てではなく、また、真実とも限らないのである。書くべきこと、書く必要のないこと、書きたいこと、書きたくないこと。作者が日記を記すまでには、さまざまに取捨選択が必ず行われている。特に『更級日記』は、現存する同時期の日記の中では比較的事事の分量が少ないことから、この取捨選択という問題を重要視すべきだと言える。

作者の人生は決して華やかとは言えないが、時代を越えその存在を強く私たちに訴えかける何かがある。物語に憧れる少女時代を経て、目の前の現実を知り、やがては信仰へと移りゆく人生は、弱く、儂くそして強い。叶わない理想に気付き、目の前の現実を日記に記すことへと展開させた女性の強さがそこにはある。理想と現実、その間で行われた取捨選択は、日記にとってどのような意味を持つものなのだろうか。この問いを基底に、日記はあくまでも「書かれたもの」であるという視点から、作者にとっての取捨選択、つまり「書くこと」がどのような意味合いを持っていたのかを考えていきたい。

一

日記を記すという行為について考えるとき、注目したいのは「書く」ことの裏に「書かない」ということが存在するこ

とである。もちろん、それは必然的に生じることであるが、ここで問題としたいのは「書かれない」ことにも意味があると考えられる場合である。実際にあったと推定される事柄の中で、敢えてそれが書かれなかったと考えられるところから、『更級日記』を執筆する上で作者が持っていた軸について考えていきたい。

まず一つ目は、父親の死である。『更級日記』の中には、作者の父孝標の描写が多く見られる。実際に父、または親という表記で孝標個人を指しているのは八例に過ぎないが、父親に関して述べている記事の分量は母や継母の記述を遥かに超えたものである。しかし、作者はその父の「死」について詳述してはいない。日記中で姉や乳母の死について記述しているだけに、記述がないのは不自然ではないだろうか。この父親の死について、あえて書かれなかったものと判断して考えていきたい。

このことについて、津本信博氏も触れ、以下のように述べている。

作者が父に対して深い愛情をよせていたことは、日記の至る所で読み取ることができるともかかわらず、その父の死をなぜとりあげなかったのか。それには『更級日記』の記事の選択という問題が微妙に絡んでいるわけで、作者が描こうとした主題は漠然としたところがあるが、自分と異性との愛情にテーマを絞ったとするならば、そ

の主題の及ぶ範囲内でしか作者は周辺の人物を取り上げなかったという結果を招きはしなかったのかと考えられるからである。その意味では作者はある程度の統一を保ったということになる。¹⁾

テーマを絞り、その主題の範囲内で周辺の人物を取り上げるといふ考え方は非常に興味深いものである。しかし、ここで大事なのはそのテーマである。孝標女が異性との愛情にテーマを絞り記事の統一をはかっていたということで、父親の死の記述がないことを証明することは難しいと考えられる。例えば、姉や乳母の死と、父親の死。これらを、異性との愛情という主題のもとで分けることはできるだろうか。津本氏の指摘には些か疑問が残る。また、日記全体を通して考えても異性との愛情にテーマを絞って書いたとは考えにくい。何らかのテーマのもとで日記が記されていたということは否定できないが、異性との愛情と断言することはできないだろう。

では、なぜ父の死は書かれなかったのか。それはやはり、津本氏の言う「主題の及ぶ範囲内でしか作者は周辺の人物を取り上げなかった」という部分に関係していると考ええる。つまり、端的に言ってしまうと「書く必要がなかった」ということである。日記中にある父親の記述をたどっていくと、そこにあるのは父と娘という関係を浮き上がらせる構図であると気付く。娘を庇護する父と、父に庇護される娘の構図である。

この父と娘の構図は、孝標が常陸介の任を終え都に戻ってきた地点で一旦区切りがついていると考えられる。その決定打とも言える一文が存在する。

「これぞ別れの門出」といひ知らせしほどの悲しさよりは、平らかに待ちつけたるうれしさもかぎりなければ、「人の上にも見しに、老い衰えて世に出でまじらひしは、をこがましく見えしかば、われは、かくて閉ぢ籠もりぬべきぞ」とのみ、残りなげに世を思ひいふめるに、心ばそさ堪へず。

以上は、ようやく再会できた喜びより、老いた父親に対しての作者の不安な心境が描き出されている場面である。この後、「父は、ただ、われをおとなにし据ゑて」と決定的な関係性の変化があったことを記す一文がある。おとなにし据ゑて、つまり父と娘の関係が逆転するのである。この後は「古代の親」「古代の親ども」というように父親一人の記述が極端に減少する。日記中に母親に関しての記述が少ないことから、作者が母親に対してある程度の距離を感じていたことが窺われる。「親ども」と表記し、父親と母親を一括りにしていることから、父親との関係に変化があったことがわかる。小谷野純一氏は、父親が常陸から戻ってきた記述に関し、それまでのいくつかの父親に関する記述を挙げ、

……作者↓孝標、孝標↓作者といったそれぞれの眼差しを明示する記載が配合されていたわけで、男と女の構

図を基に、恰も〈恋〉の論理により包括されているかに見える表現も存する程なのだが、当該章節では、そうした抑揚は消失してしまっていると断じざるを得ない。

(傍点論者)

というように論じている。確かに以前の父親の記述からは、小谷野氏の述べる「抑揚」を感じることができよう。父親が娘を想い、娘が父親を想う、作者は上記のような構図を読み手に見せようという意図を持ってはいなかったらうか。父親と「私」の関係性が一変した後に、父親に関する記述が減ることからは、「父親と娘」という構図としての役割が消えたため、書く必要がなくなったと推測できる。

もちろん、現実起こった父親の死が孝標女にとって大きな衝撃だったことは言うまでもないことであろう。しかしそれは、既に日記における作者の視点の外側の出来事なのではないだろうか。この視点とは、日記を記す上での軸の要素の一つとも言えるだろう。軸を探る上で、「私」と父親の距離の変化は一つの大きな鍵なのである。

次に、作者の葛藤が見える記述について見ていきたい。それは、今までの表現に対し、敢えて自分とは距離を置くことで自己の世界を保っている表現である。「書きたくないこと」に近いが、「書かなければならないこと」でもある表現である。ここでは、これを「消極的な表現」と呼びたい。

この「消極的な表現」は、夫に関しての記述に見ることが

できる。作者は元々自己の結婚に関して否定的に書き表していた。そこには、「夫婦」の構図は見えない。それは次の文章から見て取ることができる。

親達も、いと心得ず、ほどもなく、籠め据ゑつ。さりとて、その有様の、たちまちにきらきらしきいきほひなど、あんべいやうもなく、いとよしなかりけるすずろ心にて、ことのほかにたがひぬる有様なりかし。

結婚を指すと考えられる「籠め据ゑつ」という箇所からは、自分の思い通りにならない様子が読み取れる。自分の意思に反しているということがわかるだろう。

日記中に始めて夫・橋俊通が現れる際の表現にも注目してみたい。

そのかへる年の十月二十五日、「大嘗会の御禊」とのしるに、初瀬の精進はじめて、その日、京を出づるに、さるべき人々、「一代に一度の見ものにて、田舎世界の人だに見るものを、月日多かり、その日しも京をふり出でて行かむもいとの狂ほしく、ながれての物語ともなりぬべきことなり」など、はらからなる人は、いひ腹立てど、稚児どもの親なる人は、「いかに、いかに、心にこそあれめ」とて、いふに従ひて、出だし立つる心ばへもあはれなり。(傍線筆者)

稚児どもの親なる人、つまり自分の子どもの親なのだからそれは当然夫を指すわけであるが、遠まわしな表現ではない

だろうか。自分との直接の関係を提示するのを避けるかのような表現である。このことは、作者の視界の内側と外側を見るための重要な手がかりになるだろう。書かれているということから、夫という人物そのものは視界の内側にいることがわかる。しかし、留意すべきなのはそこに「男女」としての構図が無いことである。つまり、正確には「夫」という表記では視界の外側の人物になるわけである。あくまでも「私」の存在を表すために必要な材料なのであって、その結果生じたのが「稚児どもの親なる人」という夫・橋俊通を表す表記なのである。

客観的に見て、よい夫である姿も記す必要があったと考える。作者自身にとって、満足のいく相手ではなかったにしろ、読み手から見たときに恵まれているとわかる様子を記すことも一つの意図であったのではないだろうか。日記中において、「私」をどう見せるか、これは前述した「父親と娘」の構図からも見える通り、作者にとって大きな意味を持っていたと考える。

夫と同様に、「私」の存在を感じさせる記述がある。それは、以下の記述である。

……「年ごろは、『いつしか思ふやうに近き所になりたらば、まづ、胸あくばかりかしづきたてて、率て下りて、海山のけしきも見せ、それをばさるものので、わが身よりも高うもてなし、かしづきて見む』とこそ思ひつ

れ、われも人も、宿世のつたなかりければ、ありありて、かくはるかなる国になりたり。(中略)京にも、『さるべきさまにもてなして、とどめむ』とは思ひよることもあらず」

ここには嘆く父の姿がある。父・孝標は長元五年に常陸の介に任じられた際、期待が打ち砕かれたことを「私」の前で夜昼かまわず嘆き続けている。

このように、父の繰り言が延々と続くといった記述は日記の中でも異例であろう。作者はなぜこのような父の姿を記したのであろうか。この箇所について、鈴木一雄氏の以下の記述を参考に考えることができるだろう。

事柄を受け止める心の方向は正反対である。しかし、作者の心の内部ではほとんど距離がないのではなからうか。「どうしても書きたいこと」と「どうしても書きたくないこと」はともに作者にとって最大の関心事なのである。水と油ではない。ともに水であり、ともに油なのである。截然と分離できない場合も多々あるに違いない。「どうしても書きたいこと」のなかに「書けないこと」⁴「書きたくないこと」が粘着している場合もあるであろう。

この記述は興味深いものである。ここに、父親の嘆く姿を書く理由が隠されているのではないだろうか。作者にとって父孝標の姿を詳しく書くことは、この節では「書きたいこと」

でもあり「書きたくないこと」でもあっただろう。父親の弱さが全面的に出ていることに孝標女が気付かなかったはずがない。

しかし、この節を完成させるには、何よりも嘆く父の姿を書くことが不可欠だったのである。その姿をどうすることもできずに悲しむ自己の姿を書くことで、この節は作り上げられている。やはり結果的に、「私」を見せることになっている。

鈴木氏の指摘される「書きたいこと」と「書きたくないこと」というのは作者の体験した全ての事柄に及ぶことではないと考えることを補足しておきたい。作者はそのような視点から日記を構成しているのではなく、「書きたいこと」と「書きたくないこと」というのは軸が設定された後に、その構成の範囲の選択の上で生じることだからである。

二

ここまで、「私」とその他の人物との関係性を表わす構図が、「私」という存在を浮かび上がらせてきたことについて言及してきた。次からは、さらに強くその意図が感じられる箇所について見ていきたい。一つの構図を作り出すことが、満たされなかつた書き手自身の内部を埋めることにつながる部分である。

それは、「男女」が存在する節である。ここは、前述した

夫が書かれる節とは対照的なところである。

父・孝標が任地へ下った後、孝標女が太秦に籠もるために通った道の途中で、見知らぬ男車に出会う場面がある。

八月ばかりに太秦に籠もるに、一条より詣づる道に、男車、二つばかりひきたてて、物へ行くにもろともに来べき人待つなるべし、過ぎて行くに、隨身だつ者をおこせて、

花見に行くとき君を見るかな

といはせられたれば、「かかるほどのことは、答えぬも便なし」などあれば、

干くさなる心ならひに秋の野の
とばかりいはせて、行き過ぎぬ。

小谷野氏はこの節の記述において、

参籠の事実が眼目である記述である以上、このような事柄は本来的には、不要といってよい筈だが、作者にすれば、何としても顕示しておかなければならなかったのだと考える。

と論じている。男車が存在しなくても、太秦への参籠を書くことは可能であり、小谷野氏の述べる通り、ここで歌の贈答を記述することはただ必要な事実を述べるという意味での取舍選択からすれば「不要」であったはずである。

ではなぜそこに男車は書かれたのか。やはりここには小谷野氏が述べる通り「何としても顕示しておかなければならな

かった」理由があるのである。そこには、作者の自己顕示欲とも見える表現が存在する。自己顕示という少し語弊があるかもしれない。以前も触れたが、ここでの自己はあくまでも書かれた本人とは異なるからである。ここでの自己顕示とは、「書くべき私」を表すということである。実際に起こった事実の中から、書くべき事実を選択し、再構成していく上で、男車との出会いがあり、歌の贈答を交わしたことを書き手は記したいと考えたのである。

ここでの男車の人物は、作者の姿を規定するための一つの道具になっている。その姿とは、「男と女」が配された構図の中での「女」としての「私」の姿である。この節を「恋愛」という括りで捉えるのは、やや一方的な解釈であるかもしれない。単純にそこに記されたのは一時の歌の贈答に過ぎないからである。しかし、「構図」に着目すると一つの結論が出る。男性からの歌に答える「私」という「男と女」が配された構図が何より意味を持っているのである。

表現することで「私」を創り上げ、日記中より際立たせることで、満たされる作者。それが最もはっきり見てとれるのは、源資通との春秋の優劣を語らう場面である。

上達部・殿上人などに対面する人は、定まりたるやうなれば、うひうひしき里人は、ありなしをだに知らるべきにもあらぬに、十月ついたちごろのいと暗き夜、「不断経に声よき人々読むほどなり」とて、そなた近き戸口

に二人ばかり立ち出でて、聞きつつ、物語して寄り臥してあるに、参りたる人のあるを、「逃げ入りて、局なる人々呼び上げなどせむも見苦し。さはれ、ただ折からこそ。かくてただ」といふいま一人のあれば、かたはらにて聞きるたるに、おとなしく静やかなるけはひにて物などいふ、口惜しからざなり。

まず、一目見てその記述の長さに気付く。前述した記述はほんの一部であり、実際はこの十倍近く語られることになる。記事の分量は、その出来事が作者の中でどれくらい的位置を占めているかを知る指標としても捉えることができるだろう。「書く」ということは、「私」を表現したいという作者の意図の表れであり、その思いの大きさは、ほとんどが記述の量に比例すると考えるからである。

また、小谷野氏が、源資通と「私」が語らう場面について、これまでの時間的秩序からすると不整と言わざるを得ず、異様と評される⁽⁶⁾。

と指摘する通り、その場面が日記中でも他とは離れた位置づけにあることに注目する必要があるだろう。

当該記述の前節までの流れに着目すると、冬の記事から秋の記述へと移っており、この箇所は時間概念からずれて存在していると言えるのである。そしてさらに、その後の記述にも注目しておく必要があるだろう。その後配された節は「春ごろ」と始まる。つまり、冬→秋→春の流れで記事が配

されており、読み手は違和感を抱かざるを得ない。時間概念を無視してまで記述するというところに、日記中におけるこの記事の重要性を見出すことができるだろう。

また、この節にも歌の贈答が書かれていることに注目したい。歌の贈答というのは、『更級日記』の中で大きな意味がある。それは、一つの構図を作り出すときに必ずといっていいほど現れる作者の手法である。それは姉との「荻の葉」の歌の掛け合いや、太秦に向かう途中で出会った男車の人物との歌の贈答にも言えるだろう。「荻の葉」の歌の場面では、姉と作者が「共有」を通して物語世界を意図的に作っている。「私」を輝かせ、自己の存在を強く印象づける手法。その手法が最も効果的に見えるのが源資通との語らいの場面なのである。

この節は、自分が求める世界に最も近づいた自分の姿を書くことで、実際には満たされることのなかった自己の内部を埋めているように見える。

三

「私」を際立たせる構図があることについて述べてきたが、「私」を際立たせるのは、人物だけではない。それは、情景である。人物との関係性ではなく、視覚で捉えることのできる切り取られた一場面というべきだろうか。しかも、それらは単なる情景描写ではなく、必ず「美」が関わっている。こ

の「美」について、まずは次の記述に注目したい。

……月残りなくさし入りたるに、紅の衣上に着て、うちなやみて臥したる月影、さやうの人には、こよなく過ぎて、いと白く清げにて、「めづらし」と思ひて、かきなでつつうち泣くを、いとあはれに見捨てがたく思へど

上記は、少女期の「私」が、旅の途中の松里で乳母を訪ねたときの記述である。この段において、作者は乳母の姿を「いと白く清げ」と表現している。その月の光は、衰弱した乳母の神秘的な美しさを演出しているようである。

この段での月影は、美しさと共に読み手に「悲哀」を感じさせる。それは、この段全体に横たわる死の影と、月に存在する以下の定型のためだろう。

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの（『古今和歌集』巻第十七、雑歌上、在原業平）

月をあはれといふはいむなりといふ人のありければ

ひとりねのわびしきままにおきゐつつ月をあはれといみぞかねつる（『後撰和歌集』巻第十、恋二、よみ人知らず）

このように、当時の人々にとって月は生命力を奪う不吉な存在でもあったようだ。そのため、病床で月の光に照らされた乳母の姿に、読み手は後に訪れる死を予感し、「悲哀」を感じるかもしれない。しかし、そのときの「私」はどうだろ

う。その瞬間に書かれているのは「悲しむ」少女の姿ではなく、明らかに「美」というものに惹きつけられひたすらに乳母を見つめる少女の姿なのである。

美しさに惹かれる少女の姿というのは、少女期の「私」の精神状態、つまり少女期特有のものの見方、感じ方を表現しているように見える。それは作者が実際に経験した瞬間の心理状態とは異なる。まさにそれは「書かれたもの」に違いなのである。

深刻な場面でさえ、「美しい」と感じてしまうような一つのものに止まることのない興味、不安定な精神状態、作者が書こうとしていた少女期の自己の姿の構成要素の一つはここにあると考えられる。だからこそ、月の光に照らされた乳母の姿を見た少女は、悲しみだけにとらわれずその「美」に強く惹かれていたのである。そしてその少女の姿は、乳母の姿と共に読み手に強く印象づけられるのである。

同じように、少女期特有の物の見方と「美」が密接につながっている段がある。

足柄山というは、四五日かねて、おそろしげに暗がりわたれり。やうやう入り立つ麓のほどだに、空のけしきはかばかしくも見えず、えもいはずしげりわたりて、いとおそろしげなり。麓に宿りたるに、月もなく、暗き夜の、闇にまどふやうなるに、遊女三人、いづくよりともなく出で来たり。

注目したいのはまず、このとき月が出ていないということである。月の記述が無いのではない。「月もなく」とあえて月が無いことが書かれているのである。

旅の途中に差し掛かった足柄山の麓で、「私」は三人の遊女に出会う。その遊女について、作者は次のように表現している。

をのこども、火をともして見れば、昔、こはたといひけむが孫といふ、髪いと長く、額いとよくかかりて、色白く、きたなげなくて、「さてもありぬべき下仕へなどにもありぬべし」など、人々あはれがるに、声すべて似るものなく、空に澄みのぼりて、めでたく歌をうたふ。

このとき、遊女を照らしたのは「月影」ではなく「火」である。白く冷たい光に照らされた乳母と赤く暖かい光に照らされた遊女、暗闇の中で光る美しさには両者共に神秘性を感じる。

神秘性という観点から見ると、遊女達の「三人」という記述も見過ぎすわけにはいかないだろう。日記中に出てくる三という数字は、聖数の一つとして存在するという見方もあるからである。「野中に岡だちたる所に、ただ木ぞ三つ立てる。」「七つ三つ造り据ゑたる酒壺にさし渡したる直柄のひさごの」「葵のただ三筋ばかりあるを」というように、日記中に「三」という数字は何度も書かれている。この聖数の存在は、遊女が現れる場面において一層現実世界と切り離され

た幻想的な雰囲気を作り出しているのである。

この段において、少女期特有の物の見方と「美」が密接につながっている部分、それは「色白く、きたなげなくて」の部分を中心に見る事ができる。この「色白く、きたなげなくて」という表現は、月に照らされた乳母を表した「白く清げ」という言葉を連想させはしないだろうか。月の光に火の明かり、それぞれ違う光によって照らされた乳母と遊女には「美」がある。

しかし、その段自体に注目したときに気付くのはその段で前面に出ているのは「美」ではないということである。そこには不安、悲しみ、恐ろしさといった負の感情が見える。一見美しさとは何のつながりもないようなこれらの記述の中に「美」を存在させることに作者の意図を感じはしないだろうか。そこには、記述の底辺で単なる情景描写を越えた、少女期の精神状態とつながるようなものがあるように思える。

月の光に照らされた乳母の姿も、火の明かりに照らされた遊女の姿も、「悲哀」や「恐怖」といった負の感情から切り離されて存在する。感情から切り離された「美」。遊女の美は足柄山の持つ独特の恐ろしさを取り除く存在となるわけだが、遊女の存在は単に暗闇から少女を救うためだけのものではない。遊女は「いとおそろしげ」という表現とは切り離された世界を作り出す。注目すべきは、その世界に書かれた「私」が存在するということである。そこに存在する少女は、

その「美」に強く惹きつけられた存在として書かれている。「美」と共に「私」を存在させるということは、作者の一つの意図なのであろう。

これら二つの段の関連性から、作者の意図について考えてみたい。月の光と火の明かりは、それぞれの段においてなくてはならない表現である。これらの白と赤という対照的な光は、二つの場面を繋ぐ糸になっているとは考えられないだろうか。月を意識させる「月もなく」という記述も同様である。赤と白。存在する月としない月。暖かさと冷たさ。これらから導き出されるものは何か。それは「生」と「死」、そして共通する「美」に惹かれる「私」である。

この二つの場面を見るだけで、この日記が単純に書き連ねたものではないことがわかる。文章の中に多くの材料を散りばめ、それらに関連性を持たせることで、日記中にあるべき「私」の姿を創り出しているのである。

四

これまで、日記中の表現と、「私」との関係について触れてきたが、これらから表現の日記中における役割についてまとめていきたい。

表現は「私」の日記中での位置を明確にする役割を持っていたと言えるだろう。日記中に「私」が存在することは明確であるが、その「私」の目線から語られるために、読み手の

視線は「私」と重なり外に向けられる。その読み手の視線を「私」へ向けるのが表現の役割であったのではないだろうか。伊藤守幸氏は『更級日記』の構造について次のように述べている。

『更級日記』は、非凡が凡庸を装う体の韜晦の姿勢において破綻を来していると言わなければなるまい。

果たして、『更級日記』の記述は破綻を来しているものなのだろうか。伊藤氏の意見には疑問が生じる。これまでの作者の数々の意図から推測するに、全てが計算の上に構成された文章であると思えてならないからである。確かに、同じ表現を繰り返すなど拙い部分も見える。前後の節の繋がりが見えない部分もある。しかし、「破綻」とは読み手の一方的解釈なのではないだろうか。一つの角度から見れば「破綻」している部分も、また別の角度から見ればある一定の秩序のもとで記されたものだと考えられるからである。構成の面で述べるならば、作者は「私」を日記中にその意図の通りに存在させていた。意図を過不足なく日記に表わすという意味では、数多くの計算の上に成り立っている文章だと考える。

作者にとって日記とは、「書くべき私」を書く一つの作業であった。自分の生きてきた道をたどり、数々の出来事を繋げ合わせ、文章として「表現」すると言うことは、作者にとって二度目の人生を歩む作業であったと述べても過言ではないだろう。この人生の再構成は、作者にとって必ずしも事実通

りに行う必要は無かったと考えられる。作者の中に存在する秩序は、例え事実でも乱すことができなかつたであろう。作者の視界の内側には、「私」が存在する一つの世界がある。その視界の外側にあるものは、例えそれが作者自身の人生において大きな出来事であったとしても書かれることは無いのである。例えば、前に述べた父の死がこれにあたる。

作者にとって、書くという行為は自分が探しているものを得るためのものだったのである。「書く」先にあったものは何か。それは「私」との対面である。単に人生を振り返るといふ行為とは違い、そこに再構成を加えたのは、作者が自分だと信じてやまない「私」に出会うためである。そうして作者はこれまでの人生に意味を見出そうとしていたのではないだろうか。

以上が、本論の導き出した結論である。

注

(1) 津本信博『更級日記の研究』昭和五十七年七月、早稲田大学出版会

(2) 以下、本文の引用は全て『校注更級日記』（新典社校注叢書10、小谷野純一校注、平成十年十月、新典社）に拠る。

(3) 小谷野純一『更級日記全評釈』平成八年九月、風間書房。以下、小谷野氏からの引用は全てこれに拠る。

(4) 鈴木一雄『王朝女流日記論考』平成五年十月、至文堂

(5) 『新編国歌大観 第一巻』（『新編国歌大観』編集委員会、昭和五十八年二月、角川書店）

(6) (5)に同じ。

(7) 伊藤守幸『更級日記』の多層的構造をめぐって（『中古文』学）昭和五十八年、五月）

【付記】今回執筆するにあたり、ご指導いただきました小谷野純一先生に深く感謝申し上げます。